

ジョン・ロックによる経済の構造的把握

種 瀬 茂

一

本稿における私の目的は、第一にロック(John Locke 1632—1704)の政治論と経済論とをかれの思考の發展にそくして統一的に把握しようとする事、第二に、右の點に關連して、ロックが重商主義の見解を保持しつつも、これをこえてさらに生産過程と經濟構造の把握につきすすみ、卓越した分析を示した事、したがって、その政治論におけるとともに、經濟論においても、すぐれた理論的成果を生み出している事、否むしる經濟論におけるこの成果の上に立つてこそ政治論が成立しえた事しなければならぬこと、を説明する點にある。

第一の點、すなわち、政治論と經濟論の關連を考察するに當って、從來の論者は、政治論に示される市民社會

的見解に主點をおき、そのような見解が經濟論の中にもまた表示されていることを強調する。すなわち、政治論における勞働に基づく價值(使用價值)・私有財産の根據づけを念頭におきながら、經濟論においては、何よりもまず、地代・利子の根據に關して餘剩價值發生の原因をつきとめている點が指摘されるのである。⁽¹⁾

(1) この點に『彼の學問上の功績』がある、とローゼンブルグはいう。同著『經濟學史』(直井譯、一九四六年、研進社刊)第一卷第一分冊、一〇四ページ。Eric Roll: A history of economic thought. London 1938, 3rd. ed. 1954. pp. 113—4, 116. 岡谷他譯、一九五一年、上巻、一四〇—二二ページ、一四四—五二ページ、參照。

しかしながらロック自身の思考の發展にそくして兩者の關連を把握しようとするとき、このような一般的评价は正しくなく。

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

事實、ロッキが地代・利子の發生に關する分析を行っている論文、すなわちかれの最初の經濟論たる『利子論』⁽²⁾の執筆は、今日最も代表的傳記著者たる Fox Bourne によれば、一六七二年と推定され、『統治論』⁽³⁾は同じく Fox Bourne によれば一六八〇—一六八八年に執筆されたと推定されている。⁽⁴⁾この執筆時期を考慮すれば、『統治論』における、市民社會のあのすぐれた經濟的地盤への分析が、すでに早くロッキの把握していたところであり、その把握の上に立ってはじめてかれの市民社會論も成立しえた、と理解しなければなるまい。

- (2) Some considerations of the consequences of the lowering of interest, and raising the value of money [London, 1692.] in "The works of John Locke, the 12th edition, Vol. 4, London, 1824," pp. 1—116. 以下 Some considerations, 以下略稱する。
- (3) Fox Bourne: The life of John Locke, 2 Vols. London, 1876, Vol. II, pp. 187, 193. なお詳しくは、拙稿『ジョン・ロッキの經濟論』(『一橋論叢』第二十六卷第四號、一九五一年一〇月號)第一節参照。
- (4) Two treatises of government..... in "The works of John Locke, the 12th edition, Vol. 4, London,

1824," pp. 207—485. 以下 Two treatises, と略稱する。
鈴木秀勇譯『ロッキ統治論第二篇』(世界大思想全集、哲學・文藝思想篇、8、一九五四年、河出書房刊)
(5) Fox Bourne: op. cit. p. 276. なお、鈴木秀勇『ロッキの自然法の性格』(『一橋論叢』第二三卷第六號、一九五〇年六月號)二九—三〇頁註(6)参照。

それゆえ第一の問題たる政治論と經濟論との統一的把握のためには、經濟論の中に政治論での見解を見出そうとするのではなく、逆に經濟論自身の中でその見解がどのようにして生み出され、そして政治論に受けつがれていったかを解明しなければならぬ。こうして問題は第一の點にうつる。

ロッキは經濟論において、いわゆる貿易差額説を主とする重商主義の見解を基底としている。そこで従來の論者は、このような重商主義者としてのロッキが、『幾多の問題を既に甚だ非重商主義的なり方取扱っている』⁽⁵⁾ことを指摘することに重點がおかれてきた。何よりも指摘されるのは前述のごとく地代・利子の分析であり、その他、需給による價格決定の分析・貨幣數量説の見解があげられる。⁽⁶⁾ところが、この前者の論點、すなわち労働

に基づく私有財産の把握と市民社會の體系的解明は、いわば政治論の課題とされ、經濟論での『非重商主義的』見解は、各個の點が列擧されるにすぎない、というのがこれら論者の一般的评价である。

(6) ローゼンベルグ、同右書、一〇七ページ。

(7) ローゼンベルグ、同右書、一〇七—九ページ。Roll: op. cit. pp. 114—115. 邦譯、一四二—四ページ。

とすると、次の如き疑問が生じる。さきにふれた地代・利子の根據解明の文章は、まさしくかれの經濟論文中に表明されているのであるから、そこでこの二つの見地——重商主義的見解と市民社會的見解——とは、まさしく經濟論文の中において統一的に理解されるべきではなからうか、という疑問である。すなわちこの二つの見解がいかなる關連のもとにあるのか、を經濟論文の中で追求しなければなるまい。

この課題、すなわちロックがいかにして重商主義的見解から、ブルジョアの生産關係に分析をすすめているか、を追求すること、が本稿の第二の、そして中心的目標となる。

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

このような觀點に立って理解してみると、ロック利子論はまさしく一つの理論的轉回點に立っているといえよう。すなわち、重商主義的な一國經濟の總體把握から、いかにして一國內における經濟構造の内的分析に迫っていったかを示しているのである。これを可能ならしめたものは、一は外的條件、すなわちイングランドの當面する課題——利子引き下げに關する論争——であり、他はかれの主體的條件——王國における生産の擔い手を『土地保有者』ないし『借他農業家』に見たということ——である。このような狀況の中で貨幣を起動力として運行する國內生産、その各分野における經濟主體の活動とその相互連關とが分析の對象となり、ここにいわば先驅的な「經濟表」ともいふべき理論を作り出すにいたった。またその經濟主體の生産活動への注目、さきに言及した餘剩價值分析を生み出したのであり、そのようなブルジョア社會の經濟的構造把握ことに生産過程分析は、政治論における市民社會の體制的把握を可能ならしめたのであった。このような理解によって第一の問題たる政治論と經濟論と統一的把握という課題に答える

ことができるのである。

以上のようにみると、ロックがその経済論において單に個々の点において『非重商主義的』見解を示した、と指摘するにとどまる従來の評價は、不十分なることは明らかである。ロックの分析は廣くまた統一的であり、それは資本制生産社會の構造的把握にまで達してゐたのであつて、ここに、経済理論の發展におけるかれの最もすぐれた功績を見ることが出来る。

以下、ロックが経済論(ことに『利子論』)において、いかに重商主義の見解によりつつ、これを越えて右の構造的把握に達したか、を検討しよう。

二

経済社會の構造的把握を可能ならしめる前提は、一國經濟がその全體を一つの統一體として把えられねばならないことである。そしてこの作業はいわゆる重商主義的理論によつてはたされてゐたのであり、その集約された體系は、トマス・マン(Thomas Mun 1571—1641)の遺著『外國貿易によるイングランドの財寶』⁽¹⁾によつて表

明されている。ロックはその経済論の基底にいわゆる貿易差額説をもつてゐたことは明白であり、マンの定式とロックの表現とは酷似してゐる。⁽²⁾

(1) Thomas Mun: England's treasure by foreign trade..... [London, 1664.] in "Economic classics ed. by W. J. Ashley. N. Y. and London, 1895. 張漢裕譯(岩波文庫、一九四二年)の著作の執筆時期は一六二八年前後と推測されてゐるが、マンの死後三年、その子ジョン・マンの手によつて一六六四年、王政復古(Restoration, 1660)後に出版せられたのである。同右邦譯解説、一六四—一五ページ、參照。

(2) Some considerations. pp. 5, 12—14, 15—19, 19—21, 62, 72, 78—79, 90, 96, 107—111, 115.

Further considerations concerning raising the value of money..... [London, 1695.] in "The works of John Locke, the 12th edition. Vol. 4. London, 1824." pp. 148—9, 152—3. 前掲拙稿『經濟論』六六・七三—四ページ、參照。

(3) 貿易差額説の外、かわせや貨幣についての兩者の見解の一致は明白である。すなわち、かわせは貨幣の流出入に従つて變動し、後者はさらに貿易の差額に従つ、という見解はマン、ロックとも相等し。

Mun: op. cit. Chap. XII—XIV. Locke: Some conside-

rations, pp. 17—19, 49—51.

貨幣に關して尊重せられるのはその名稱ではなく、『鑄貨の内在的價值』なのであり、それは他の一切の財産の『共通の尺度』であるから、『公正且つ不變のものとして維持されるべきであり、』それゆえ名目引き上げ等の諸政策によつては王國の富の増加も、その流出も防ぎえない、とされる。マンのこの見解はまたロツクの改鑄論における見解と基本的に相等⁽⁵⁾。Mun: op. cit. Chap. XIII—IX. ロツク貨幣觀については、次の拙稿を参照されたい。『ジョン・ロツクの貨幣論』(一橋大學研究年報『經濟學研究』一九五四年)第六節。『ジョン・ロツクの貨幣論・續』(『一橋論叢』第三二卷第五號、一九五四年一月號)第七節。

マンとロツクとの見解の類似は、當時における國際的な對立抗爭の中でイングランドの富強を目指すという状況から、けだし偶然ではあるまい。しかもマンの説くところは重金主義的貨幣觀の克服の上に立つ貿易差額説⁽⁴⁾であり、そこには貿易自由化への強い主張すら見出される。これに對してロツクは、その主張においてむしろ個別差額説の見解に近く、對フランス貿易禁止を主張するウィッグ派の保護貿易政策に深い關連をもつ⁽⁵⁾。

(4) とくに第十章、第十一章における内外人の貨幣使用制

ジョン・ロツクによる經濟の構造的把握

限に對する反對論に著しい。同右書邦譯解説第三章第三節参照。張氏はその第四章でこの思考がスミスに直結するように見られるが、この點はより複雑な歴史的狀況と思想の展開を見なければならぬことは、近時の諸研究に指摘される通りである。

(5) W. Ashley: The Tory origin of free trade policy. in "Surveys historic and economic. London, 1909." pp. 269—270, 298—299. 拙稿前掲『經濟論』第四節参照。

今ここでの論點について重要なのはマンとロツクが、このような重商主義的見解の上に立ちながら、しかも相異なる思想的展開を見せてゆく、その過程を、一國經濟の總體的把握とその內的構造の分析について見ることである。すなわち、マンの理論がはじめて一國經濟を全體として扱えたとされるその見解に對比するとき、ロツクがいかに生産分野へ視點を轉回して、重商主義的見解を超越していったかが、明らかとなるであろう。

そこでまず、マンが一國經濟の把握をどのようにはたしているかを検討しよう。マンは東印度會社の理事として、その仲繼貿易に對する非難に答えるため、全般的貿易差額説を案出し、さらに外國貿易一般が國富増進の方

策たることを明らかにしようとした。こうした國際貿易關係の中で一國の利益をはかるうとするとき、ここにはじめてその國民經濟が一つの統一體として把握され、かくして貿易の全般的差額によって國富増進が把握されることになったのである。⁽⁶⁾

(6) op. cit. Chap. II. 邦譯、第二章 我が王國を富まし、我が國の財實を増加する諸方法、に示される定式化を見よ。そこで『一國の資産』と『一個人の資産』とが比較され、その増大の方策が相等しいことをのべているが、このことは一國の經濟を全體的に把握していることを示している。その他、國際貿易の中では各國は對等の立場にあり、我々の商業上の統制は他國もまた報復的に行い、このような各國取引の總體が國際的貿易を形成すると見ている點にも示されている。op. cit. p. 45, 46-7. 邦譯、六八・七〇—一ページ、参照。

マンはさらに貨幣の資本としての運動形式把握にまでつきすすみ、貨幣の退藏ではなく、それを流通に投じ増殖させることが資本としての貨幣の生命であることを洞察した。『惟ふに王國の資産においても私人の財産においても事情は同じである。商品の貯へを有つてゐる私人は、だからと云つて、自分の貨幣を輸出したり若し

くは、それで貿易をしたりしないとは云はないのみでなく(かく云うは滑稽の至りである)、又之を商品に換へ、以て彼らの貨幣を増加し、かうして一つのものを他のものに絶えず規則正しく換へることにより富裕となる』⁽⁷⁾と。まさしく貨幣資本の増殖が定式化されている。しかしマンがここで明らかにしている如く、それは貿易に投下されるのであり、流通過程の中における商業利潤にその焦點がおかれていた。

(7) op. cit. p. 22. 邦譯四二ページ。

このようなマンの理論は商業資本家としてその經濟的活動に熟知し、ヨーロッパ諸國の狀況に接して、廣く新しい文化的・政治的視野のもとに、理論化をせまられたかたにして、はじめて可能であった。それは一國經濟の總體的把握を可能ならしめ、もはや宗教的・政治的體制とはことなる純經濟的な眼で經濟社會把握に成功して⁽⁸⁾り、しかも同時に資本の生命たる増殖の點を餘剩價值として明確に定式化したのである。

(8) 貿易均衡の經濟的運動は、『いかなる抵抗をも越えて、一つの必然により生ぜざるをえない』とマンは強調して、

no. op. cit. p. 119. 邦譯一六〇ページ。

それゆえマンは、輸出促進の方法を論じて、毛織物工業の発展をとき、あるいはまた、その輸出の増大による國內羊毛の價格騰貴が土地價格の騰貴をもたらして地主の利益となることに言及している。

(9) op. cit. p. 11. 邦譯一九ページ。

(10) ibid. pp. 29—30. 邦譯五一ページ。

マンのこのような分析は、外國貿易の觀點からのそれであり、その影響のもとに國內産業への觀點がひらかれているのであり、その限りにおいては、このような生産的活動の論述は注目に値しよう。しかしながらこれらの生産活動への注目は主として政策的論點から説かれているとどまり、さきにしめされたようなかれの經濟社會の總體的把握の中に理論化されるに至らなかった。すなわち、これら諸經濟主體の生産活動がそれ自體として理論的に分析され、全體としていかなる經濟構造を組成し、それがいかにして運行されるのか、の問題はかれの分析の視野に直接の對象として登場してはいない。このことはかれの一國經濟の把握が國際的貿易關係の中でい

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

わば對外的に確定されてきたことに起因している。問題はそのようにして把握せられた一國經濟の內的構造を分析することであり、このような國內生産分野への分析の深化は、商業資本家としてマンにとってはいえないものであったし、ここにかれの理論の限界があると言わねばならない。

(11) さらにマンは『自然の富』に對して『人工の富』・工藝を一そう利益ありとし、オランダ富強の原因をここに見てゐる。op. cit. p. 17 and Chap. XIX. 邦譯三六七ページおよび第十九章、参照。

ロックはその重商主義的見解において、マンに依據しながら、まさしく一國經濟の構造的把握に達することによって、マンの限界を克服しえたのであった。しからば、ロックはどのようにして右の超克をはたしているのだろうか。

三

ロックが『利子論』においてはたそうとしている課題は、法定利子引き下げの主張に對する反駁である。利子

率の低下が、負債の支拂い、土地の改良、交易と製造業への貨幣使用をうながすことは當然だが、しかしそれが同時に貨幣の供給を増すであろうか。否、現に六パーセントでも供給は不足している、いわんや論者の主張することとき四パーセントにおいてはなおさらであろう。⁽¹⁾この貨幣供給増大の方法は貿易による出超以外にはない。⁽²⁾貿易差額はこれを基礎付ける論理として示される。⁽³⁾

(1) Some consideration. pp. 77—78.

(2) かわせの操作や鑄貨名目の引き上げによって貨幣供給量の増加をはかるうとする方法を、マンもロックもともに拒否している。前掲第二節註(4) (5)、拙稿前掲『貨幣論』第三節、参照。

(3) 前掲、第二節註(2)、参照。

しかしながら今ロックの當面せる利子の問題は、貿易差額による金銀の獲得と國富増進という一國經濟の總體的把握のみで、解決しつくすことはできない。利子率が交易に必要な貨幣資本の需給によって定るとすれば、交易に對する貨幣の必要性和その量とが問われるであろう。そのためには國內における貨幣流通の状況を解明しなければならぬ。こうしてロックの分析は、經濟の内

的構造に向うのである。かれは、その點にこたえて次のごとくいう。

『交易 trade にとっての一定比率の貨幣の必然性は(思うに) つぎのことにある。すなわち、その循環において、交易の種々の車輪を動かしている貨幣は、それがその水路の中にある間(なぜならそのあるものは不可避免的によんだ貯水池にそそがれるだろうからである)すべて、その土地が諸原料を産出する土地保有者 landholder、それら加工する労働者 labourer、仲介業者 broker、つまり商人 merchant と小賣店主 shopkeeper、およびそれらを費す消費者 consumer の間に分けもたれる、ということであり、⁽⁵⁾それゆえ、一國內にはどんなに低く見積っても、『労働者の年賃銀 wages の百分の一、土地保有者の年収益 revenue の八分の一、および仲介業者の年収入 returns の四十分の一部分』に當るだけの現金が、交易の運営に必要とされるのである、と。

(4) Some considerations. p. 46. (5) *ibid.* pp. 21—22.

(6) *ibid.* p. 28.

このようにしてロックは貨幣流通の過程にそくして、

各經濟主體の所得の流通を把え、それによってこれら所得を生み出すイングランド經濟社會の內的構造を描き出すにいたつたのである。しからば、ここに把握されている諸經濟主體の活動を、ロックはどのように分析し、理論化しているのであらうか。ロックがその經濟論の種々の論述中に示すところを總括してみよう。

さきの引用に示されるように、その主導的位置は土地保有者にある。かれは自らの土地をもち、労働者を雇ってこれを耕作し、その生産物(穀物・肉・羊毛等)を市場に運んで販賣する。⁽⁷⁾土地保有者は『かれの土地と勤勞がかれに與えるだけの諸財を市場にもたらす』⁽⁸⁾外ないのであるから、かれの眞の利益は、その生産物がよりよく賣れ、より大きな價額を生み出すことである。『これこそ、眞に、土地の所有者を利し、土地とともに續くところの一利得であり、このことだけが地代を引き上げ、その所有者をより富ましめるのである。』⁽⁹⁾そのためには富を増大し、貨幣を國內にもたらさねばならない。ロックはまた別の個所で、地代下落の原因に關し、不良な土地所有權・不良な經營・土地生産力の減退にふれてゐる。この

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

ように土地保有者は國內における中核的『第一の生産者』⁽¹²⁾として把えられ、その活動は労働者を雇用し、市場販賣のための生産を行う、資本制生産活動に外ならない。すぐれた土地經營による生産力の發展、勤勉と節約による富の蓄積を目指す、この土地保有者階級こそ『王國の負擔の大部分をになう人』であり、最も保護獎勵が與えられねばならないのである。⁽¹³⁾

- (7) Some considerations, pp. 25 f. 54 f. 70 f. (8) *ibid.* p. 59. (9) *ibid.* p. 62. (10) *ibid.* p. 62. (11) *ibid.* pp. 69—70, 128—9. (12) *ibid.* p. 74. (13) *ibid.* pp. 28, 62.

だがそれと同時に土地保有者は小作人 *tenant* に土地を貸し、それによって地代をうる地主 *landlord* と同じ姿をとるものとされてゐる。⁽¹⁴⁾この地主はその小作人たる借地農業者 *farmer* にその土地を貸し、地代をえてゐる。借地農業者は労働者を雇ひ、耕作し、その生産物を市場にもたらして販賣する。⁽¹⁵⁾

- (14) *op. cit.* pp. 25—6. (15) *ibid.* pp. 19—20, 24—25, 57—58, 70. かれは市場における消費量(それに去年の殘餘分と、來年のための豫備

を差引して)を基準としそれに比例するように生産量を調整してやる。ibid. p. 47.

ここにいう土地保有者とは、農業における資本制生産の創設の時期に當って、それを促進し自らもそれに従事しつつあった進取的地主階級 (yeomanry 上層と gentlemanly 層) を意味している。ロッキはまずこの階層を農業生産の主體と見るのであるが、同時にその間に出現してくるまさしく農業資本家たる借地農業者に注目せざるを得ない⁽¹⁶⁾。そこで農業生産については、ある時には土地保有者がある時には借地農業者がその擔い手として示されることになる。

- (16) 前掲拙稿『貨幣論』一九六—七ページ、後掲、本節註
(31) (48) 参照。 Cf. Christopher Hill: *The English Revolution*. London, [1940], new ed. 1949, p. 24—25.
C. Hill and E. Dell (ed.): *The Good Old Cause*. London, 1949, pp. 61, 471. 後述されるように土地の商品化はすすみ、繁榮せるイニエ地方の商工業者は土地資産を買って、土地保有者となる。Some considerations, p. 39.

農業における資本制生産をその創設の時ににおいてかくも深く把握しえたロッキは、それによってまた、餘剰價

値の發生の分析において鋭い理論化に成功したのである。ロッキにとっても土地が餘剰價值生産の土臺である。貨幣が不妊であって何物も生産しないのに對して、『土地は人類にとって新しい有效な價值ある物を自然的に生産する⁽¹⁷⁾』そしてこの土地と土地保有者の勤勞が生み出す生産物の販賣による収入が、農業生産の收益 *revenue*⁽²⁰⁾ であり所得 *income*⁽²¹⁾ である。ロッキは賃銀所得を別に考察しておりここには含まれていないのであるから、これは地代という形式をとった餘剰價值に外ならぬ。

- (17) *op. cit.* p. 36. (18) *ibid.* p. 59. (19) *ibid.* pp. 32, 33. (20) *ibid.* pp. 26—8. (21) *ibid.* pp. 33, 36, 46.

ところがロッキは土地保有者からさらに借地農業者へと分析の歩をすすめる。しからは同じ地代という表現においても、前者とことなりここでは資本制的地代が示されることになる。何故に小作人たる借地農業者はこれを地主に支拂うことができるのか。ロッキは答える、借地農業者の勞働によって、土地は地代以上の果實 *fruits*⁽²²⁾

すなわち所得の餘剰⁽²²⁾を、生み出すからであり、この所得から地代が支拂われるのである⁽²³⁾。と。借地農業者のこの所得はもはや地代という形式もかなぐりすてたまぎれもない餘剰價值であり、その中から資本制地代が支拂われる。さらにロックはいう、このような土地賃借を發生せしめた原因は、土地の不平等な分配に外ならない⁽²⁴⁾、と。すなわち、自ら使用する以上の土地をもつ地主は、耕作に熟練し勤勉と節約によって富を生み出す土地をもたない人々に貸し出すのは、『正當かつ合法的』⁽²⁵⁾なのである。このようにしてロックは資本制生産における餘剰價值と、その配分(利潤と地代への)とを、把握した。かれは餘剰價值生産において小作人・借地農業者の勞働をよくに重視するとともに、土地の不平等な配分(土地所有權の確立)こそ、この他人の勞働の成果を地代として取得する原因であるとしたことは、かれの理論的分析の最も重要な功績とされるのである⁽²⁶⁾。

(22) *op. cit.* pp. 36—37, 46. (23) *ibid.* p. 36.

(24) *ibid.* p. 36. (25) *ibid.* p. 37.

(26) 前掲、第一節註(1)参照。

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

他方ここで雇用される勞働者を、ロックはつぎのように把える。かれらはその所得・賃銀をもって、土地保有者・借地農業者から食料を買い、商工業者からは、衣料や道具を買い入れる⁽²⁷⁾。かれらは、『手から口への』⁽²⁸⁾生活を行っており、その賃銀は『最低生活費』⁽²⁹⁾以上には出ないのであって、それゆえ物品税や流通貨幣不足のために生ずる物價騰貴に際しては、賃銀の引き上げか、さもなければ救貧法による教區の救済にたよらねばならない⁽³⁰⁾。ロックにとっては、かれらが賃銀の引き上げによって、土地保有者や商人層のごとき富者と相争うことを考慮する時間も機會もないものとされるのである⁽³¹⁾。

(27) *op. cit.* p. 23. (28) *ibid.* pp. 23, 57.

(29) *ibid.* p. 71. (30) *ibid.* pp. 57, 70.

(31) *ibid.* p. 71. このような勞働者階級に對するロックの態度は、前述のように、土地保有者の立場に立つかれにとって當然であり、また一六四二—一六〇年の内亂に對する不安、王政復古歡迎の態度に通じる。 Cf. *The works of John Locke, the 12th ed.* Vol. 8. London, 1824, p. 268. Hill: *op. cit.* pp. 75f.

しからは工業生産分野はどのように把えられているで

あろうか。その中心は毛織物マニユファクチュアである。ここでは、織元 *clothier* が原料たる羊毛を土地保有者・借地農業者から買入れ、労働者あるいは職人 *workman*, *handicraftsman* を雇い、毛織物を生産し、これを自らの手でか、あるいは貿易商人を通して販賣する⁽³²⁾。雇用される労働者・職人は、農業労働者と全く同じく、その賃銀をもって、生活必需品を買入れる。

(32) *op. cit.* pp. 16, 24-25, 73. 毛織物製品についても、國內市場が大きな割合をもっていることを、ロックは示している。 *ibid.* p. 73.

ところがロックはこの織元をマニユ経営者としてむしろ批判的に見ている。かれらは買占めや現物給與による賃銀切り下げによって労働者・借地農業者・土地保有者を壓迫する獨占者として批判され、これに對してむしろ、工匠 *artificier*, *artizan* Ⅱ マニユ経営者 *manufacturer*・労働者・職人に對し保護奨励が與えられるべきである、と述べた。

(33) *op. cit.* pp. 24-25. (34) *ibid.* pp. 15, 16, 28.
(35) *ibid.* p. 70. (36) *ibid.* p. 29.

しかしロックはこのマニユ経営者Ⅱ工匠に關して、農業分野におけるごとき生産内容の分析を全く行っていない。ロックの指摘するマニユ経営の主体は商工業者 *tradesman* である。ハリファクス *Hullifax*、エクセタ *Exeter*、タートン *Taunton* のごときマニユ地方において、かれらはその勤勞によって繁榮し、貨幣を蓄え、それを土地財産の購入に當てるのである⁽³⁷⁾。前述の織元がいわゆる『都市の織元』とすれば、この繁榮せる商工業者は、『農村の織元』およびそれと結合した商人層といえよう⁽³⁸⁾。

(37) *op. cit.* pp. 39, 54. これらの地方が、いわゆる「農村の織元」の中心地帯であつたことは、注目にあたいる。大塚久雄『近代歐洲經濟史序説上巻』(一九四六年、第二刷、日本評論社刊)二五六―九・二七六―七・三七七註7、参照。

(38) 「農村の織元」層の確立とともに、新しい商人層が「都市の織元」「毛織物商」(*traders*)「毛織物輸出商」(*Merchantadventurers*)に對立しつゝ、形成される。大塚・前掲書、三五四―五ページ、参照。後掲、本節、註(42)参照。

しかしながらロックはここでもまた直接にその生産内

部の分析は行っていない。マネー経営の主體たる商工業者は、ロッキの論述においては、資本制的生産の主體としてよりはむしろ、貿易商人・國內販賣商人の性格を興えられているのである。⁽³⁹⁾ ロックにとってはマネーフアクチュアはなお、商業資本の活動によって把握されているのであり、それゆえ前述の工匠は労働者・職人と同じ性格をもつものと見てよいであろう。工業生産分野での資本家は、いまだ獨立した對象とはなるにいたらず、商工業者という商人層の姿をとって示されているにすぎない。

(39) *op. cit.* pp. 8—9, 54—5, 64.

しからば商業活動についてロックはどのように見ているであろうか。國內流通の媒介者としての商人、ことに怠惰な小賣商店主は、貨幣循環を停滞せしめ、さらに交易の利益をくいつぶすものとして、手きびしい批判があげせられている。⁽⁴⁰⁾ これに對して外國貿易に従事する貿易商人や商工業者は、とくにマネー製品輸出に關連するものとして分析の對象となる。ロックが、仲繼貿易に従事している商人層について全くふれていないことに注意す

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

べきであろう。むしろ前述のマネー経営としての商工業者に見ることく、國産品販賣の主體としてその活動が把握されているのである。⁽⁴¹⁾ それゆえ、ロンドン金融業者の獨占のために利子率が高く、かれらの勤勞によって獲得される利潤がくいつぶされることのないよう、考慮されねばならぬとされる。⁽⁴²⁾

(40) *op. cit.* p. 28. (41) 前掲註(37) 参照。

(42) ロンドン金匠の獨占に對し貨幣がイングランドの各地方に平均して分配され流通することが、商工業者にとつて有利であり、交易を促進する、とロックはいう。この意味における交易は國內各地におけるそれをさし、商工業者が單に大都市における外國貿易のみでなく、國內生産の分野に密着していたことを示している。 *ibid.* pp. 8—9, 64.

ロックはこの貿易商人と商工業者の收入 *return* が、やはり労働によって生れるとし、さきの地代による餘剰價值分析と平行して、利子發生の原因を追求する。⁽⁴³⁾ 貨幣の不平等な分配は、それを必要とする人々への貸し出しを當然ならしめる。しかるに『貨幣は不妊の物であって何物も生産しない、がしかし、契約によって、ある人の労働の報酬であった利潤を、他の人のポケットに移轉さ

せる。』こうしてロックはここでもまた利潤（餘剰價值）は勞働の成果であり、利子はその一部分の移轉に外ならぬとしてゐたのである。

(43) op. cit. pp. 9, 11, 15—16.

(44) ibid. pp. 36—37.

ここにいう利潤は、明らかに商業利潤であつて、ロックはこれもまた勞働によつて生み出されるとしてゐる。このことは、前述のように、マニユファクチュア生産が商人層によつて支配されている、という状況に起因するものであり、そこで發生する利潤がいわば商業利潤の形式において示されているのである。このような未熟さを見とめた上で、利子發生に關する右のロックの分析を考察するならば、貨幣資産の不平等な分配・利潤利子發生の根據と、餘剰價值の發生、配分の把握を行つてゐると言わねばなるまい。前述の地代の分析と同じく、かれのすぐれた理論的功績とされるゆえんである。⁽⁴⁵⁾

(45) 前掲、第一節、註(1)参照。

ロックが經濟論の中で論及する以上のような分析を總合すれば次のごとくならう。土地保有者は自らの土地

で、借地農業家は地主から土地を借り、勞働者を雇つて生産を行う。その生産物は自らの手かあるいは仲介業者たる貿易商人・商工業者・小賣商店を通じて、國內・國外に賣りさばかれる。こうして土地は年々の收益（土地保有者の年々の收益、借地農業家の利潤）すなわち餘剰價值を生み出す。借地農業家はその勞働によつて得た利潤から地代を支拂う。地主階級はこれによつてその生活を⁽⁴⁶⁾支える（その子供・召使の生活は地代に依存してゐる）。他方、土地保有者・借地農業家から原料（例・羊毛）を⁽⁴⁶⁾買入れたマニユ經營者（織元）は同じく工匠・勞働者・職人を雇ひ生産を行う。その製品（例・毛織物製品）は、織元によつてあるいは貿易商人・商工業者の手を通じて、國內・國外に販賣される。勞働者階級はそのえた賃銀をもつて、生活必需品を土地保有者・借地農業家・商工業者から買入れて消費する。貿易業者・商工業者・小賣商店主は農工の生産物をその生産者から國內・國外の消費者へと媒介し、かれらもまたその勞働によつて利潤を獲得する。かれらが事業の運営に資本を借り入れたならば、右の利潤から利子が支拂われねばならぬ。

(46) *op. cit.* p. 26. (47) *ibid.* p. 29.

ロックはマニユファクチュアがいまだ商人層に支配されて見ると見るのであるから、以上のような経済の構成を、次の三階級に要約する。すなわち、農村における地主・ブルジョアジー(土地保有者・地主と借地農業者)労働者階級(工匠・労働者・職人)および商業ブルジョアジー(貿易商人・商工業者)である。(48)労働者階級はいまだ他の二階級と争う力をもたない。(49)そこで通常の対立は土地所有階級 landed-man と商人との間に起る。物品税 Excise か地租 land-tax (この場合地代税である)かの問題についても、貨幣不足による交易減退の負擔についても、商人はこれを轉嫁して損失をうけず、すべての負擔は『第一の生産者』たる土地保有者・借地農業者の上にかかる。かれらこそ、イングランド王國の支えであり、その利益が最も注意されねばならない階級なのである。(50)

(48) これらの経済主體が王黨派(貴族・大地主)に對して、議會派を形成する。ロックのいう土地保有者・地主の向背は二重であつて、前述のごとく内亂や労働者階級の反抗に

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

對する不安・王政復古歡迎の態度はその一側面といえよう。しかしかれらはすでにみたように、深く資本制的な農業生産にふみ入つていたのであつて、このことが、王政復古期のスチュアート絶對王政に對立し、一六八九年の『名譽革命』(“Glorious Revolution”)を生み出す力となつてゆくのである。ロック政治論は、それゆゑ、この『名譽革命』の理論的基礎づけとなつたこと、言うまでもない。Cf. Hill: *op. cit.* pp. 37, 75 f. 前掲、本節註(16)(31)参照。

(49) 前掲、本節註(31)参照。

(50) Some considerations, pp. 55 f.

(51) *ibid.* pp. 70 f. (52) *ibid.* p. 74.

(53) 前掲、本節註(13)参照。

ロックが利子問題を契機として交易に必要な貨幣量を算定するに當つて、かれの構想の基底にあつたものは、以上のごときイングランド經濟社會の構造的把握であつた。それに基づいて、必要貨幣量が、土地保有者の年收益・労働者の年賃銀・仲介業者の年収入という所得を基準として算定され、貨幣はその流通の過程において、これら所得の支拂いをはたしてゆくものとされるのである。(54)

(54) 前掲、本節註(6)参照。(55) *op. cit.* pp. 22—23.

すなわち、労働者が毎週その賃銀をえて、これを生活資料に支出し、その貨幣が再び借地農業者・土地保有者の手にかえって、次の賃銀支拂に對して準備されてゆくためには、かれらの手中に、週賃銀支拂分だけの貨幣がつねに必要である。⁽⁵⁶⁾ 地代については、借地農業者が地主に對して四季支拂日ごとに地代を支拂いうるためには、借地農業者はその生産物の販賣によって漸次貨幣を手に入れそれをたくわえて、支拂日にそなえる。地主はまたその地代を受取ると同時に拂い出してしまふわけではないから、少くともこれら兩者の手中に、土地の年收益の四分の一部分に相當する貨幣が必要である。⁽⁵⁷⁾ 次に仲介業者については、かれが販賣によってえる貨幣をたくわえ、これをもって市場において商品を買入れ、また信用借りを支拂う。そこでこのためにはかれらの年収入の二十分の一の貨幣が少くとも必要となる。⁽⁵⁸⁾

(56) *op. cit.* pp. 23—24. (57) *ibid.* pp. 25—26.
 (58) *ibid.* pp. 27—28. 何故二十分の一という割合が算定されるのか、をロックは説明していない。さらにここでいう年収入 *yearly return* は、商人の運轉資金を意味し、商業利潤をも含むさらに広い概念である。ロックは右兩者を

ともに *return* という言葉で表わしている。

このような必要貨幣量測定の手法を見れば、貨幣流通にそくしながら、各經濟主體の所得の循環を念頭においていたことは明らかである。それゆえ國內流通のうち、賃銀所得については、その循環のプロセスの解明にまで進んでいる。即ち、土地保有者・借地農業者と労働者とが流通過程の兩端に立ち、⁽⁵⁹⁾ 貨幣は労働者の賃銀として、前者から後者へ支拂われるが、次に後者から前者へ生産物(生活必需品)購買にもなって回流してくるのである。⁽⁶⁰⁾ そしてこの兩極を媒介するものが仲介業者である。⁽⁶¹⁾

(59) *op. cit.* pp. 16, 74. (60) *ibid.* p. 24.

以上のように、ロックの分析は、一國經濟の内的構造を解明して、これを農業生産を起點として把え、貨幣流通にそくして各經濟主體の所得の循環を明らかにし、さらに前述の賃銀の場合に示されるように、農業生産が流通過程と所得循環を媒介として運行するという、把握にまで達しているのである。このような經濟の構造的把握は、まさにケネーの「經濟表」の先驅的理論ともいうべきであろう。⁽⁶²⁾ ことにロックが、ケネーと同じく、土地の

生産性を中心にしながらも、借地農業家の労働を重視し、利潤を労働に基礎づけ、地代は土地財産の不平等な分配から生ずる利潤の一部の移轉であるという分析にまですすみえていることは、かえってケネーに比して深い餘剩價値の把握を示すものといわねばならぬ。

(5) François Quesnay, 1694—1774. 『經濟表』(Tableau économique) が最初に印刷されたのは、一七五八年であった。邦譯『ケネー經濟表』(増井・戸田譯、岩波文庫、一九三二年) 譯者序、七ページ、参照。

(62) なお、ロックが物品税に反対して地租すなわち地代への課税を主張していることは、ケネーの單一税 (impôt unique) と相等しく、兩者の理論的關連を端的に示すものであるとされている。前掲、本節註(50) 参照。J. K. Ingram: A history of political economy. London, [1888], new and enlarged edition, repr. 1919, p. 52. 以下を Roll: op. cit. p. 116. 邦譯「一四四—五ページ」参照。

もとよりロックのいう労働がなお使用價値生産労働であって、價値を生産する抽象的人間労働にまで抽象化されていないことが注意されねばなるまい。この点においてケネーと等しく、同時代人、ペティ (William Petty,

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

1623—1687) に對して一步をゆずるべき位置にあった⁽⁸³⁾。

(63) この「具體的・有用的労働」の把握は、ロック政治論における労働に最も單的に示されている。Two treatises. Bk. II. Chap. 5, §. 40—43. 邦譯「七五—七七ページ」。そして、そこに示されるロックの労働の把握、分業の狀況の分析は、スミス (Adam Smith, 1723—1790) の分業論に酷似する。Smith: Wealth of Nations, ed. by E. Cannan. N. Y. 1937. Modern Library edition. p. 12. 大内兵衛譯『國富論』(岩波文庫、一九四〇年) (一) 三五—三七ページ。もとより、スミスの把握する労働が、より深い意義を有することはいうまでもない。

さらにまた、ロックの分析は、地代・商業利潤の循環にひいて、それに必要な貨幣量が流通しなければならぬ、とのべてはいるけれどもそれがどのようなプロセスをたどって回流してくるかを明確化していない。その意味においてロックは、總體的な再生産過程の把握について極めて不十分である、と言わねばなるまい。

このことはロックがあれ程まで深く内的構造を把えながら、その總體的把握についてはいまだ重商主義の見解をその寄り所としていることに起因している。かれにと

っては一國の富は金銀に存し、貿易差額による金銀の導入が目標であり、そのためには、貨幣を起動力として交易を促進しなければならぬ、という流通過程からの接近方法がとられている。それゆえロックが所得循環を解明するに當っては、各經濟主體の活動に必要な貨幣量の確保に主點がおかれ、かれの把握した經濟構造が、この所得循環を通して、どのように運行されるのかを、全面的に理解するまでにはいたらなかった。このような重商主義の見解が完全に克服されて、生産過程とその組成が全面的に對象化され、構造的體系として整理され、生産物と貨幣との流通にそつて、社會總資本の再生産過程が表示されるまでには、なおやく一世紀を要したのである。

四

以上が、ロック『利子論』に示されたところの經濟の構造的把握である。ロックが依據していた貿易差額説は、一國經濟の最初の總體的把握であり、資本の形式の正しい把握であった。マンはこの資本増殖の原因を論證するために、有名な農夫 husbandman の例をあげる。『農

夫が地中に多くの良穀を撒く種播時において見るだけなら、吾人は彼を農夫よりもむしろ狂人と目するであろう。しかし、彼の努力の結末になる穫入れにおける彼の勞働を考慮すれば、吾人は彼の行動の値打ちと豊富なる收穫を發見するのである。』⁽¹⁾マンはこの農夫の比喩を以て、貨幣資本増殖の原因を説明した。

(1) *Mun: op. cit. p. 27*. 邦譯四八ページ。

右のような農夫の生産活動が單に比喩として示されるにすぎないところに、マンの商業資本家的限界は明白である。しかるにロックにとっては、まさしくその農業生産こそが直接の分析對象となつてあらわれてくる。ここにおいて、流通過程にもとづく資本形式の把握や、國際貿易の分野から見ると一國經濟の總體的把握、という重商主義の見解にもとづきながら、それにとどまることなく、生産過程における餘剩價値の發生が、そして生産を起點とする一國經濟の構造的把握がロックによってなしとけられるにいたつたのである。

以上のようにロック經濟論を理解するならば、われわれは本稿第一節にのべた第一の問題を、ロック自身の内

的關連をたどって、解くことができる。經濟論と政治論との關連は、前述のごとく論者が強調するように、單に、餘剩價值分析の點にのみ存するものではなく、より深く深い内的關連のもとにあると言わねばならない。すなわち、ロックが以上のごとく把えたイングランド經濟の内の構造、とくに農業分野における生産過程分析こそ、政治論における市民社會分析の母體であつた。

(2) 前掲、第一節註(1) 参照。

ロックは『統治論』における「自然の状態」の構想の中で、勞働による所有權の基礎づけを論ずるに當り、『所有權の主眼は現在では大地に生きてゐる獸ではなく、他の・あらゆるものを包含しまた伴つてゐるものとしての大地そのものである』⁽³⁾として、共有地からの『圍い込み』⁽⁴⁾も最も重視してゐる。そして『勤勉で分別のある人々』⁽⁵⁾が、その勞働によって『耕作し、植えつけを行い、改良を施し、栽培を行い、』⁽⁶⁾かくしてその土地を自らの所有とするのは、『神と人間の理性』の命ずるところとされてゐる。⁽⁶⁾そしてこのような勞働の投下による生産性の發展を、アメリカ原始林・荒ぶ地とデヴォンシア(Devon-

shire)での圍い込み地との對比によって示す。⁽⁷⁾このような農業生産分野における勞働とそれにもとづく大地の私有財産化(圍い込み)の論理は、さきの經濟論における、土地保有者(かれらは圍い込みによって資本制生産を農村に展開させた主體である)⁽⁸⁾の活動、それを中心におくかれの經濟體系の理論的基礎を明らかにしたものである。

(3) Two treatises. Bk. II. Chap. V. § 32. p. 356. 邦譯「トウ・テイツ」。

(4) Ibid. § 32. p. 356. 邦譯、同右。

(5) Ibid. § 34. p. 357. 邦譯七一ページ。

(6) Ibid. § 32. p. 356. 邦譯七〇ページ。

(7) Ibid. § 37. p. 359—360. 邦譯七三ページ。

(8) 前掲、本稿第三節註(16) 参照。

さらに私有財産に與えられた消費による限界は貨幣の導入によって克服される。すぐれた土地が『アメリカ大陸のまん中であつて、世界の他の部分と商業を行い、生産物の賣却によって貨幣を入手する望みが全然ないところだつたとすれば、』⁽⁹⁾このような土地を人は『圍い込み』⁽¹⁰⁾するに値しない。ところで、貨幣が使用され『人が土地

生産物の過剰分を金銀と交換する』ことができる状況——まさにさきのアメリカに對比すればイングランドといふべきだろう——においては、その労働を投じ、土地を自らの消費限界以上に所有し、かくして『獨占的資産の不平等』をもたらすことができる。⁽¹¹⁾この土地の圍い込みは、前述のごとく、生産力の強化による富裕の状態をもたらすであろう。

- (9) *op. cit.* § 46—50. pp. 365—367. 邦譯七八—八〇ページ。ここに示される價値の結晶體としての貨幣の本質に關する把握は、經濟論におけると全く等し。Cf. *Some considerations*, pp. 22—23. 拙稿『經濟論』六六一—七四—七五ページ。『貨幣論』二一三—四ページ、參照。
- (10) *ibid.* § 48. p. 366. 邦譯七九ページ。
- (11) *ibid.* § 50. pp. 366—7. 邦譯八〇ページ。

この状況はまさに、經濟論におけるイングランドの状態把握にひとしいことは明白であろう。農業生産を起點として「勤勉と節約」によって生産を増加し、奢侈をいましめ、以て貨幣の蓄積をもたらす。その主導的な主體はいうまでもなく土地保有者であり、また繁榮せるマニエ地方の商工業者である。⁽¹²⁾

- (12) *Some considerations*, p. 39. 前掲、第三節註(37) (38) 參照。

もちろん、政治論における以上の論述は、「自然の状態」の論證であり、それは、市民社會・政治社會の論理的前提である。しかし現實の市民社會は、このような「自然の状態」における自由と所有權とを、平和、安全、公共の利益のために、政治權力によって保證するものである。⁽¹³⁾それゆえ、ロックの市民社會の具體的・經濟社會的内容はこの「自然の状態」において理論的に把握され得るといふわけになるまゝ。

- (13) *Two treatises*, BK II, Chap. IX, § 131. pp. 414—415. 邦譯一三三—三三ページ。

以上のように見れば、ロックの政治論において、市民社會の基礎づけというべき、重要な見解、所有權の勞働による基礎づけと、貨幣使用による資産の蓄積が、經濟論におけるイングランド經濟社會についてのかれの深い把握にねざしているものと、理解することができる。そして政治論におけるこの分析が、アダム・スミスによつて繼承されてゆくことは、衆知のことにぞくする。⁽¹⁴⁾

(14) 前掲、本稿第三節、註(63)参照。

Cf. James Bonar: *Philosophy and political economy*. London, [1893] 3rd ed. 1922. p. 101.

われわれは以上のようにロック経済論を把えることによって、経済理論におけるかれの位置を見定めることができる。

當時のイングランドはロックの把えているように、マニファクチュアも商人層にそして輸出に依存し、また農業においても輸出穀物生産がその発展の重要なことであった⁽¹⁵⁾。このようなイングランドが國際商業戦の中で國富の増進をはかろうとするとき、重商主義的諸政策は決定的に重要となる。その意味において、マンの重商主義的見解はその理論的表現として生きているといわねばならぬ。ロックが一國の富の把握においてマンを繼承していることは⁽¹⁶⁾、まさしく右のようなイングランド經濟社會の狀況によるものであり、そしてこの重商主義的見解はステュアート (Sir James Stewart 1712—80) において、その『合理的表現』⁽¹⁷⁾を見出すことは、いうまでもない。

ジョン・ロックによる經濟の構造的把握

(15) W. Cunningham: *The growth of English industry and commerce in modern times*. Part I. *The mercantile system*. Cambridge, [1882], 5th ed. 1912. pp. 540—541.

(16) ロックが貨幣は價値の結晶體であるという正しい金屬主義的貨幣觀をとりえたのも、この重商主義的見解にもとづく。かれはその見地に立って一六九六年の大改鑄事業を理論的に指導した。と同時に、交易にとつての流通貨幣の必要性という流通過程への着目が、數量說的見解を生み出してくるのである。これらの點については前掲、拙稿『貨幣論』第六節、『貨幣論・續』第七節、参照。

(17) Karl Marx: *Theorien über den Mehrwert*, herausgegeben von K. Kautsky. Bd. I. Stuttgart, 1921. S. 32. 向坂逸郎譯『新譯剩餘價値學說史』第一卷、(一九三六年、改造社刊) 五〇ページ。

しかしながらロックの意味するところはマンとことなる。すなわち、マンが商業資本の利益を主眼としていたのに對し、ロックは、國內産業(ことに農業生産)の主體たる土地保有者・借地農業家の利益が保護促進されねばならないとするのである⁽¹⁸⁾。この立場からかれは、一國の富の總體的把握におけるマンの見解に依據しつつ、さらに、その內的構造の把握にいたることによって、重商

主義見解を超克すべき道程をきりひろくことができた。

(18) このような主體的立場の差異から、マンの全般的貿易差額説は貿易自由への展望を興え、ロックのそれは、いわゆる個別差額説・「議會による重商主義體制」(Parliamentary Colbertism)の理論的支柱となるのである。前掲、第二節註(6)(7)参照。

まさしくロックの經濟論は、經濟社會の分析において、流通の過程から生産過程への、轉回點に立っているということが出来る。そしてこの轉回によって生み出されたかれの理論的成果は、その一方の生産と價值・勞働・私有財産の理論はスミスに、他方の經濟構造把握の理論はケネーにと、それぞれ古典派經濟學の中核的體系者にむかう理論的發展の展望を興えているのである。¹⁹⁾

(19) ロッシャーは、『國民經濟學に於ける最初の偉大な體系樹立者であり、然る限りに於てアダム・スミスの尊敬すべき先驅者である!』としている。しかしかれの指摘する點は『經濟學のうち心理學の領域に最も近く接する部門に没頭し、驚く程完全にこれを取扱っている』ということにある。ロックの眞の體系はこのような點ではありえないこと、明白である。Wilhelm Roscher: Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre im 16. und 17. Jahrhundert. Lpz. 1851. Aus dem III. Bde. der Abhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften. S. 93. 杉本榮一譯『ロッシャー英國經濟學史論』(一九二九年、再版一九四七年、河文館刊)一九六ページ。

(一九五五・一二・二〇)